

愛知・清洲城下町遺跡きよす

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八四年(昭59)六月～一〇月
- 3 発掘機関 財愛知県教育サービスセンター
- 4 調査担当者 福岡晃彦・梅本博志・長島 広・清水雷太郎・梅村清春・宮腰健司
- 5 遺跡の種類 城郭・都市跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(名古屋北部)

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する木曾川水系五条川の西岸に発達した自然堤防と、その後背湿地上に位置する。調査地点の近くには、南三〇〇m程の所に、遺跡名の由来となった清洲城本丸推定地があり、また五条川を挟んだ東岸では、ほぼ時期を同じくする朝日西遺跡の調査が進められている。

木簡類の出土した五九年度調査地点は、『清洲町史』等によれば清洲城を巡る三重の「堀」のうち、内堀と中堀の間に比定され、武家屋敷地と推定される部分にあたっている。

五九年度の調査では、東西、あるいは、南北に一定の方向性を有し、当時の地割の方向を反映すると思われる溝群、及び井戸・土塙等が確認され、このうち、南北方向をとる三条の溝(NR〇一、SD〇一、SD〇五)より、今回報告する資料が出土した。これらの溝は、いずれも、清洲城下町の形成・発展期にあたる一六世紀～一七世紀初頭に存続したと考えることができるが、なかでも、竹材等による護岸柵を有するSD〇五が比較的古く、他の二条は、これよりやや新しい段階で、ほぼ併存して機能していた様である。

遺構内からの出土遺物は、いずれも、土師質土器が中心で、瀬戸・美濃窯系製品、中国陶磁器、金属器等もみられるが、とりわけ箸・下駄・曲物・漆碗など、多量の木製品が際立った存在となっている。また、文字資料としては、SD〇一から、底部外面に、赤色漆で、「玉安」と記された漆器碗が、SD〇五からは、やはり底部外面に「上せん」、「せ□の」等の墨書を施し、さらに孔を加えた土師質皿が、七点ほどまとまって出土している。

8 木簡の釈文・内容

清洲城下町遺跡出土の木簡類は、墨痕を確認し得たものの総数九八点に達したが、断片が多く、部分的にでも釈読し得たのは、三分

の以下の三一点にとどまった。

- (1) 「能持是經者」 (100)×(13) 061
- (2) 「縁果」^{〔報生劇カ〕} (93)×(18) 061
- (3) 「無量衆所尊 為」 (136)×(34) 061
- (4) ^{〔定治カ〕}「長」^{〔龍カ〕}「御れうこんさま」 (132)×(15)×1.5 065
- (5) 「久罷久罷」
- (6) 「歩兵」^{〔仕候カ〕}「ま」 201×(42)×2 081
- (7) 「大くに」 28×12×3.5 061
- (8) 「三何」 110×26×5 061
51×18×1 021

(9) 「(花押)」

・「永」^{〔年カ〕}
三月八日

47×26×4.5 065

これら木簡類のうち、量的に目立つのは、「柿經」の断簡と考えられるもの(1)(2)で、全体の約半数にあたる一六点を占めている。筆写されたのは、いずれも法華經の文言と考えられ、全て、NRO一北端部に堆積した植物遺体層中よりの出土であった。また、この他でも、笹塔婆(3)、あるいは、野位牌と考えられるもの(4)、等が多く、全体の七割以上が、仏教色の強い遺物となっている。

これ以外では、全長(推定)三二cm程の刀形の柄部分に針書し、墨を入れたもの(7)、あるいは、上端圭頭の木札に花押を記し、裏面に日付を有するもの(9)、同じ文言をくり返す習書らしきもの(5)、等があり、また、一点ではあるが、将棋の駒(6)も出土している。

なお、木簡の積読にあたっては、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部加藤優氏の全面的な御指導を得た。記して感謝したい。

9 関係文献

勸愛知県教育サービスセンター『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』(一九八四年)

(梅本博志)